

# 博士学位論文

内容の要旨および審査結果の要旨

第 8 号

2015年3月

同 朋 大 学

## はしがき

この要旨集は、学位規則（昭和28年4月1日文部省令第9号）第8条の規定による公表を目的として、2014年度に本学において博士の学位を授与した者の「論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨」を収録したものである。

学位記番号に記した学位規則第3条第1項（いわゆる課程博士）によるものであることを示す。

# 目 次

学位記番号	学位の種類	氏名	学位論文題目
文博甲第 14 号	博士（文学）	河村 諒	真宗における救済—王舎城の悲劇を通して—

氏名(本籍地)	河村 諒(三重県)		
学位の種類	博士(文学)〔同朋大学〕		
学位記番号	文博甲第14号		
学位授与月日	平成27年3月23日		
学位授与の要件	同朋大学学位規定第3条第1項該当		
学位論文の題目	真宗における救済—王舎城の悲劇を通して—		
論文審査委員	主査 本学教授	博士(文学)	田代俊孝
	副査 本学教授		小島恵昭
	副査 本学教授	博士(経済学)	伊東真理子
	副査 本学専任講師	博士(文学)	伊東恵深

河村 諒

## 「真宗における救済—王舎城の悲劇を通して—」

### 内容の要旨

(構成)

序章

第一章 韋提希の救い

第一節 『観無量寿経』の解釈

第二節 『観無量寿経』の概要

第一項 韋提希の課題

第二項 去此不遠

第三項 無生法忍

第四項 阿弥陀仏の住立空中

第五項 摂取不捨

第六項 三心

第七項 下品下生の往生

第八項 来迎

第三節 まとめ

第二章 阿闍世の救い

第一節 親鸞からみた阿闍世

第二節 「信巻」における阿闍世の物語の概要

第一項 難治の機

第二項 阿闍世の課題

- 第三項 六師の説
- 第四項 慙愧
- 第五項 阿闍世王の為に涅槃に入らず
- 第六項 月愛三昧
- 第七項 釈尊の説
- 第八項 無根の信
- 第九項 唯除
- 第十項 信心仏性

### 第三節 まとめ

## 第三章 真宗における浄土観

- 第一節 本章の目的
- 第二節 親鸞の浄土観
- 第三節 名号
- 第四節 転
- 第五節 即
  - 第一項 転と即
  - 第二項 同時即
  - 第三項 正定聚のくらいに定まりつく
  - 第四項 即のまとめ
- 第六節 個人から一切衆生の救済
- 第七節 まとめ

## 結章

- 第一節 真宗における救済の道
- 第二節 今後の展望

(内容)

## 序章

死への関心は、生死における問題意識や苦悩から生じると考えられる。したがって、生死の問題や苦悩を乗り越えることは、自分自身が死についてどのようにとらえ、死をどのように受け入れていくかを考え、そして、これらのことを通して生死への執着から離れて生きることにつながるという、重要かつ有意義なことである。

このような、死の恐怖、あるいは自分自身の死をどのように受容し、克服して、乗り越えていくか、という生死の問題や苦悩の超越は、現代における課題であると同時に、親鸞においても重要な課題であった。親鸞は生死の問題や苦悩を超えていくなかで、韋提希や阿闍世といった人物たちが機縁となって、すなわち、王舎城の悲劇の物語を方便として、私たち凡夫が救われるという浄土の教えが説かれているととらえた。すなわち、王舎城の

悲劇の物語は生死の問題や苦悩を乗り越えることに対して応えるものであると解釈したとする。

そこで、本論文では、生死の問題や苦悩をいかに超えていくことができるかということ、王舎城の悲劇の物語のなかから確かめていくこととする。そして、王舎城の悲劇を機縁としてひらかれた浄土について確かめていくこととする。これらを通して、真宗における生死の問題や苦悩の超越に関する一視座を示すことを目的としている。

## 第一章 韋提希の救い

本章では、『観無量寿経』において示される王舎城の悲劇と韋提希の救いに関して、善導の解釈、親鸞の解釈、及び、真宗における先学の解釈をたずねている。そして、真宗における韋提希の救いを確かめている。

韋提希の抱える問題とは、自身は宿業の身であり、その業報、因果によって生じる生死に関する苦悩であった。しかも、その問題は、解決のための答えを求めても答えはないのである。しかし、その答えを求めずにいられない。そのような宗教的要求が韋提希の課題として示されている。すなわち、韋提希の課題は、宗教的要求としての生死の問題や苦悩をどのように乗り越えるか、ということであった。そして、韋提希は、自身は虚仮不実の身であり、罪悪深重の身であると自覚し、悲歎する機の深信と、そのような身であっても阿弥陀仏は摂取不捨のはたらきにより私たちに救うということを知する法の深信を獲得した時に生死の問題や苦悩を乗り越えた、ということが示されている。しかも、その救いは臨終の時や死後ではなく、信心獲得した即の時、つまり、現生において、からだは娑婆にありながらも心は浄土に居るといふ、宗教的要求が満たされての救いであった。

生死の問題を乗り越えるには、生死について自身がどのように受け止め、認識するかという主体的な受け止めが問題となってくる。その受け止めに際して、自身は罪悪深重の身であるという自覚をし、しかし、そのような身のまま救われるという信知が肝要である。このことは、罪悪深重の身であるまま救われるため、生死の問題やそれに対する煩悩に執着をする必要がない、ということである。生死の問題やそれに対する煩悩は、たとえば長寿を望んだり、自身の病を否定したりするなど、そのままの生や死が受容できないために生じるのである。

韋提希の救いの物語には、信心獲得を通して生死の問題や苦悩を乗り越えていく道が説かれている。すなわち、『観無量寿経』では、生死の問題や苦悩の超越に関して、現生における超越でなければならないということと、そのままの生死を受容することが生死の問題の超越につながり、ひいては生死への執着から離れた生を生きることにつながることを示されているとする。

## 第二章 阿闍世の救い

『教行信証』「信巻」において引かれている『涅槃経』の文では、阿闍世を中心とした視点での救いが示されている。親鸞は、阿闍世は難治の機であり、煩悩具足の凡夫であるととらえていることが窺われる。一方、親鸞も自身は罪悪生死の凡夫であるという自覚がな

されていたと考えられる。しかし、親鸞はただ凡夫の自覚をしていただけではない。その煩悩への執着をせずにはいられない自分自身に対して嘆き悲しみ、苦悩していた。

このような親鸞は、同じく凡夫である阿闍世の物語を通し、自分自身と阿闍世を重ねて、生死における問題や苦悩を乗り越える、自身の救いの道を確認しつつ、明らかにしていったと考えられる。そこで、第二章では、阿闍世がどのように救われていったのかを「信巻」に引用される『涅槃経』の文を中心にたずね、真宗における救済について、阿闍世の救いの視点から確かめている。

阿闍世の抱える課題とは、生死における問題や苦悩の超越であった。そして、この問題や苦悩の根本には、罪の意識への執着があった。阿闍世や親鸞をはじめ、私たちは何かしらの罪の意識を抱いており、その意識に対する執着によって生死における問題や苦悩は生じると考えられる。そして、このような生死の問題に苦しむ私たちは、自身は宿業の身であり、業縁存在であるという機の自覚と、阿弥陀仏の摂取不捨のはたらきを信知することを通して、罪の意識に対する執着から解放され、生死における問題や苦悩を乗り越えていく。

以上のように、真宗の教説において、『涅槃経』に示される阿闍世の救いには、私たちに難治の機であることを自覚させながらも、阿弥陀仏はそのような私たちを除くことなく、摂取不捨のはたらきをあらわし、煩悩具足である身のまま私たちを救うということが説かれている。このような生死に対する執着、とらわれから離れ、そのままの生を生きることによって、生死における問題や苦悩を超越し、生死への執着から離れた生を生きていけるということが、阿闍世の救いの物語には説かれているのである。つまり、ここで示されている救いとは、死後における救いではなく、現生における救いなのである。

そして、この阿闍世の救いの物語は、親鸞は自身の信仰体験をあらわしていると同時に、私たちに信心獲得をうながしているのである。この真実信心は、自力では獲得することができず、阿弥陀仏によって回向されるものである。つまり、生死に対する執着、とらわれから離れ、そのままの自分自身でありながら生きる世界とは、絶対他力の世界であり、阿弥陀仏にゆだねる世界なのである。

### 第三章 真宗における浄土観

親鸞は、韋提希や阿闍世の救済の物語を通して、如来よりたまわる信心を要として、自身の生死出づべき道、すなわち、浄土往生の道を歩んでいった。しかし、生死における問題や苦悩を超越する浄土往生に関して、浄土とは何かということを明らかにしなければ、現実としての救済につながらないと考えられる。そこで、第三章では、親鸞は浄土をどのようにとらえたかについて確認し、その結果を踏まえ、真宗における救済について検討を行うことを目的とした。

親鸞は、浄土を如来（阿弥陀仏）の摂取不捨のはたらきとしてとらえていた。その摂取不捨のはたらきを信知し、信心獲得し、阿弥陀仏の回向によってなされる称名念仏によって、現生において正定聚に住する。このことが、煩悩の心そのまま菩提へと転じ、心は

浄土に居すと表現されているのである。そして、その具体的な相が名号であるにとらえていた。すなわち、称名念仏によって、私たちは、自身が救われることを自覚するのである。

生死における問題や苦悩は、自身が宿業の身であるということから生じる煩悩によるものであった。自分自身はそのような身であると自覚をしたときに、生死における問題や苦悩をもたらす煩悩は、一切衆生との関係によって生じるものであり、自力によるはからいではどうすることもできないことを自覚する。このように、自身は宿業の身であり、自力無功の身であることを自覚し、そのような身でありながらも、そのまま救われていくことが信知される。この信知がなされると同時に、阿弥陀仏よりたまわる、念仏もうさんとおもいたつところによる称名念仏がなされる。この行と信によって浄土がひらかれ、自身は必ず救われるため生死に執着する必要がないことを自覚し、生死の執着から離れ、そのままの生死を受け入れる身へと転じるのである。すなわち、他力による称名念仏の道こそが、真宗における救済の実践の道なのであると述べる。

また、私たちは業縁存在であり、私たちは一切衆生やすべての物事との関係によって成り立っているのである。すなわち、私たちが抱く生死における問題や苦悩とは、まわりとの関係性によって生じるものであり、社会が抱く生死における問題や苦悩である。そして、信心獲得したところにひらかれる浄土、すなわち、阿弥陀仏のはたらきによって、主体的な立場としての個人の救済だけではなく、そこから普遍的、全体的な立場としての一切衆生の救済へと広がる。

そして、その超越となる浄土往生の道とは、この穢土を「我ら」一切衆生がともに歩む道である。一切衆生がともに歩む道において、そのままの生死を受け入れるということは、他者との関係性や物事をありのままに受け入れるということである。このことは、ひとりひとりのありのままの生死が尊重されるということである。これがすなわち、ともに歩む称名念仏による浄土往生の道なのである。

## 結章

自分自身は宿業の身であり、業縁存在であることを自覚し、そして、そのような身でありながらも、自身は救われる身であることを信知することで、宿業や業縁から生じる煩悩や生死における苦悩を超越することが、真宗における救済であった。それは、たとえば生命の操作や死の先延ばしといった煩悩へのとらわれから離れ、そのままの生を受容し、今の人生を歩んでいくというものである。この現生において自身の救いを自覚し、生死における問題や苦悩を超越するすがたこそ現生正定聚としてあらわされるのである。

そして、この自身の救済は、一切衆生の救済へとひろがるのである。韋提希も阿闍世も自身が救われたのと同様に一切衆生も救われることを皆に伝えようとしたように、自身の救済の道は一切衆生とともに歩む救済の道、浄土往生の道なのである。そして、それは親鸞においても同様であった。親鸞は生死の問題に対して苦悩し、また、煩悩具足の身である自身に悲歎し、生死出づべきみちを求めた。すなわち、個人の救済の道である。しかし、親鸞個人の救済の道は一切衆生の救済の道へとひろがっていった。そして、自身の救いの

道を後の人々に伝え導き、信心獲得をうながし、一切衆生とともに歩む浄土往生の道を示した。

真宗における生死の問題や苦悩の超越とは、死後の世界を実体的にとらえ、求めるものではなく、生死における問題や苦悩を生じる煩悩へのとらわれから離れ、この身のまま救われることを信知し、今を生きるというものである。そして、一切衆生がともに歩いていく、私たちひとりひとりの生死が尊重される称名念仏の道である。